かたりべ 44

豊島区立郷土資料館だより

写真1　「昔聞いたことがあるみたい」「いいお声ねえ」「このうた覚えたいわ」：軽妙な話し方と美しいのどに拍手喝采！

写真2　「どっちが前？こっち？」「ほんものの獅子頭をつける前に、これで練習するんだって」：長崎小学校3年生の見学

楽しみながら「郷土」を実感！

九月二八日（土）から十一月十七日（日）まで開催されました、特別展『長崎村物語―江戸近郊農村の伝承文化―』の一端を紹介します。

会期中に、二回の記念講演会を行ないました。①長崎村の歴史（十月十九日・田島俊雄氏）と②歌でつづる村の歳時記（十月二六日・写真1）です。①では、講師自身の郷土でもある長崎の歴史をお聞きしました。②では、田島五郎氏（明治四四年生まれ）に、一九二三（大正一二）年の関東大震災後から昭和初期にかけて歌われてきた〝歌〟を実際に歌っていただき、そして、歌の解説を小野寺節子氏にしていただきました。餅搗き歌、七草のとなえごと、麦打ち歌、田の草取り歌、まりつき歌（お月さまいくつ）等々は、ほとんどの参会者にとって、はじめて聞く地元に伝わる歌だったようで、和やかな雰囲気のうちに時が過ぎました。

ところで、展示室内には、見学者が手で触れることができる資料を展示しました。学校のまわりの歴史をさがそう（マグネット式パネル）、藁製の獅子頭（写真2）、雨乞いの水を入れる竹筒、臼と杵等です。ガラス越しに見る時とは違った角度から、郷土の資料を実感していただけたのではないかと思っています。（福岡）

千川上水通水三百年記念企画展

千川上水三百年の流れ

12月15日(日)まで開催中!

〈月曜休館〉

今年は千川上水が造られてから
ちょうど300年目にあたります。郷土資料館では
フィールドワーク「千川上水を歩く」や企画展
「千川上水300年の流れ」、そしてミニシンポジウム
「千川上水300年の歴史」を企画しました。
これらに関連して、これまで寄せられた千川上水
に関する様々な質問にお答えしたいと思います。

Q 千川上水は、いつどのような目的で造られたのですか?

A 幕府は江戸の急速な人口増加にともなう水の不足を補うため、一六五三(承応二)年に玉川上水の開削に着手しました。その後の江戸への人口流入により玉川上水だけでは上水が不足となったので、青山上水(一六六〇年)・三田上水(一六六四年)などが開削されました。その後、三田上水の完成から三二年後の一六九六(元禄九)年に、青山・三田上水と同様に玉川上水を分水して完成したのが千川上水です。千川上水の目的は湯島聖堂・上野東叡山・小石川の白山御殿、浅草の浅草寺御殿などに給水することにあり、江戸北西部の本郷・下谷・浅草などの地域へも給水されていました。

＊　＊　＊

Q 千川上水を開削したのは誰ですか?

A 千川上水の開削は千川徳兵衛・太兵衛らが請け負い、竣工後は両家の子孫がその管理に当たっていました。徳兵衛・太兵衛の二人はこの千川上水工事の功績で千川の苗字を賜ったとされています。しかし、一九六六(元禄一二)年の古文書を見ると徳兵衛・太兵衛の他に善九郎・与市郎という人物も「千川」の苗字を名乗っていますし、享保年間に作成されたと推定される絵図面にもこの四人が「水元役」として記されています。この他にも万屋(よろずや)次郎兵衛という人物も千川上水の開削に関わったという資料があります。ですから、千川上水の開削にはこれら五名が関係していたと考えられます。なお、千川上水の設計には河村瑞軒(ずいけん)が携わったともいわれています。

＊　＊　＊

Q 千川上水が「千川用水」と呼ばれるのは何故ですか。

A 千川上水は「千川上水」より「千川用水」という呼びかたの方が馴染みがあるという人は多いかも知れません。それは千川上水の使われかたにも一因があるかもしれません。

千川上水が開削されて間もない一七〇七(宝永四)年には流域の村々からの嘆願により農業用水として利用することが認められました。給水されていた村は関村・上石神井村・下石神井村・中村・中新井村・下練馬村(以上現練馬区)・上井草村・下井草村・阿佐ヶ谷村・荻久保村・天沼村(以上現杉並区)・江古田村・上鷺の宮村(以上現中野区)・葛ヶ谷村(現新宿区)・長崎村・池袋村・巣鴨村(以上現豊島区)・中丸村・金井窪村(以上現板橋区)・滝野川村(現北区)の二〇ヵ村です。

しかし、一七一四(正徳四)年の白山御殿の廃止の影響もあってか、一七二二(享保七)年

に三田・青山上水とともに廃止されることになりました。その後、一七七九（安永九）年に浅草の町人からの嘆願もあって再び上水としての利用が始まりますが、一七八六（天明六）年に再び廃止されることになります。その後は千川水道株式会社がこの流路を利用して一八八〇（明治一三）年から一九〇七（明治四〇）年まで給水をしていました。このように、千川上水三〇〇年の歴史の中で上水として使われていたのは僅か六〇年間余りです。

このことが、つねに千川の水流を見ていた人々が「千川用水」と呼ぶ一つの理由なのではないでしょうか。

＊　＊　＊

Q　玉川上水沿いには多くの水車が設けられていたと聞いていますが、千川上水の場合はどうだったのでしょう。

A　現在までに紹介されている、千川上水に関する水車の記録は寛政年間（一八九〇年代頃）までさかのぼることができます。明治期になると、その初期頃の千川上水の状況を表している「千川上水路図」には水車と思われる描画が八か所みとめられます。また、一九〇五（明治三八）年の「千川水路水車取調書」を見ると、九か所の水車が稼働していたことがわかります。そして、下流部の水車が製粉・精穀に利用していたのに対し、上流部の水車が針金製造を行なっていたことがわかります。

これらの水車に使われていた部品のうち、練馬区上石神井一丁目で昭和四〇年代まで稼働していた田中水車に使用されていたつき臼や、同区南田中一丁目で戦前まで稼働していた八成（はちなり）水車に使用していた万力（まんりき）（歯車）などが保存されています。また豊島区長崎五丁目にあった岩崎水車の写真が最近見つかりました。

昭和初期の岩崎水車　田島五郎氏提供

豊島区域にも一か所ではありますが、水車がありました。現在の長崎五丁目の流路に、幕末か、あるいは明治の初めに設けられたと思われます。この水車の設立者は小山三右衛門という人物で、東京府から一八七七（明治一〇）年に営業許可が下りています。その後、板橋宿の大野久兵衛という人物の経営となり、一八九四（明治二七）年に長崎村の岩崎鉄五郎の手に渡ります。このことから、この長崎村西原の水車が「岩崎水車」と呼ばれるようになったのでしょう。

＊　＊　＊

Q　千川上水は現在どうなっているのですか。

A　現在は、東京都による清流復活事業の一環で一九八九（平成元）年から一部の水流が復活しています。玉川上水からの取水口から青梅街道との交差点の手前までの間の約五キロメートルで、散策路として整備されています。そこから、水流の七割が善福寺池へ流れ、残り三割の水がかつての流路を通ってJR埼京線板橋駅の先まで流れ、そこから北流して石神井川へ落ちています。ですが、水管はそこから下流にある千川上水公園（豊島区西巣鴨2－39）の地下に設けられた沈澱槽（ちんでんそう）まで続いています。（伊藤）

千川上水公園に残る調節バルブ

［資料紹介］

雲雀ケ谷自由学園の昼食

この写真は昭和一〇（一九三五）年前後の雲雀ケ谷自由学園の昼食光景です。自由学園は夫婦共働き家庭のための保育施設として、大正一五（一九二六）年宮下蓮子さんの父藤山友吉氏が、自営の屋根板工場を改造して設立しました。住所は西巣鴨町大字池袋字雲雀ケ谷戸二〇八一番地（現・池袋本町四丁目）で、学園名は字名からとっています。ここは赤羽線（現・埼京線）と東上鉄道（現・東武東上線）と谷端川にはさまれた三角形の低地帯で、町工場が密集し、昭和一二年に新校舎を建てた頃には、二〇〇人近くの子供たちが通っていたようです。

また、近くの山手線の開通工事で堆積した残土の山（通称「赤土山」）は、子供たちの恰好の遊び場でした。しかし昭和二〇年四月の空襲によって校舎は全焼し、学園の歴史はわずか二〇年で幕を閉じたのです。（協力：嘉津山節子氏、佐々木浩子氏）

（横山）

なにを食べているのかな　宮下蓮子さん（小金井市在住）からは写真のほかに多くの資料を提供していただきました。

編集後記

♣今年も残すところあと一月となりました。かたりべ44号をお届けいたします。

特別展「長崎村物語」は好評のうちに無事終了し、二三五八名の方が見学されました。また、期間中には見学者から多くの情報提供や資料の寄贈をいただきました。ご協力ありがとうございました。特別展の成果と課題については、後日『年報』などに報告する予定です。

＊　＊　＊

♣11月24日から企画展「千川上水三百年の流れ」が始まりました。今回練馬区と板橋区との共同調査によって新たな資料が発見されました。ぜひこの機会にご来館ください。

＊　＊　＊

♣展示替えによる臨時休館および年末年始の休館日は、12月17日～20日、12月28日～1月4日です。来年もよろしくお願いいたします。

（Y）

かたりべ
・
No.44
・
1996年11月30日
・
豊島区立郷土資料館
・
豊島区西池袋2-37-4
・
電話03－3980－2351

豊島区広報印刷物L30-08-026
本紙は再生紙を使用しています